

ヤギ被告控訴審「被告人質問では真実を」

あいりちゃんの父 遺影抱え聞き入る



法医学者の証人尋問を聞くヤギ被告
(イラスト・竹本佐治)

広島市安芸区の小学1年木下あいりちゃん(当時7歳)を殺害したとして殺人罪などに問われたホセマヌエル・トレス・ヤギ被告(35)の控訴審第2回公判が高裁で開かれた29日、ヤギ被告は、証人尋問で法医学者が証言する姿を時折天井を見上げながら見つめ、遺族で父親の木下建一さん(40)はあいりちゃんの遺影を抱え、時折メモを取りながら聞き入っていた。

ヤギ被告は、エンジ色のジャンパーに白いセーター、ジーンズ姿で、着席すると「みなさん、こんにちは」と発言。公判中は汗ばんだ様子で、途中でジャンパーを脱いで証人尋問を聞いていた。

公判後、木下さんは「唯一残された真実を知る証人は、ヤギ被告のみだということを自覚することを切に願う。子を持つ親として、そして、人間として、次の公判の被告人質問では、誰しもが疑うことのない真実を話してもらいたい。そして、反省してもらいたい」とコメントした。

1審から裁判を傍聴している作家の佐木隆三さんの話「弁護側は、検察側鑑定の矛盾を突きたかったのだろうが、結果的に成功していないと感じた。あいりちゃんが亡くなった事実に向き合って罪と罰を考えるべきで、弁護側の主張には無理があるのではないかと感じた。控訴審では、被告のペルーでの女兒に対する性犯罪の取り扱いが最大のポイント。次回公判の被告人質問で検察側がどう説明するか、控訴審の一つの山場になるはずだ。被告は1審と比べて落ち着いた様子だった。心を開いて話をしてほしい。そこが控訴審の行方を決めるのではないだろうか」

(2008年1月30日 読売新聞)